謡曲畫誌
自六至十

謡曲畫誌巻之六目録

竹生嶋

知章

采女

木賊

源氏供養

謡曲画誌巻六

竹生嶋ハ江州の湖中にあり孝霊天皇の御宇一夜乃
地拆て湖水となる駿河国富士山ハ湧出と同時なる故に世
土俗云伝へに江州湖水乃生出す駿河国に湧出富士山と云ふ又
里景行天皇十二年八月廿四日の夜此湖中に一の嶋始て現す三
枝竹を生ぜし故に竹生嶋と名く其竹當社の宝物と成て今ニ
あり或経に南閻浮提の中に湖海あり海の中に水晶輪有則
天女の所住也と説り回一里にて一の岩に似く嶋なるを群蛇嶋の
周流に於ゆる岩石水晶宝珠多し聖武天皇の御宇竹生嶋
乃神大仏に現れ給宣ふるありいにしへ帝此嶋に行幸ありて行基に
詔して弁才天女の宝殿を造り玉ふ而より以来天女の神威四方に

竹生島
一つ松
謡曲畫誌巻六

唐崎明神

緑樹影沈魚上レ樹
青波月冷兎走レ波
弁天

竹生嶋乃景
ツナキ嶌

琵琶を抱て天女よ交り空く半天ハ月くらぬ

知章

一の谷乃軍敗れて新中納言知盛子息武蔵守知章郎等監物太郎頼方子須三騎落ゆく所に児玉党十余騎よこさまに追かけ知盛を討らんとす武蔵守父を討せじと懸隔欲挌と引組首を児玉か家人の欲ける処ニ落合て武蔵守を討監物太郎彼童を討て我身も痛手を負て自害せりけり所ニ知盛ハ究竟の名馬に乗海上廿余町游せ大臣殿の舟に乗りて知盛大臣殿ニ申されけるハ武蔵守も討れ監物も討死仕候ぬ今ハ心て無甲斐命をのがれ是まで帰り参りぬいかなれハ親ハ子をすてゝ若鈍ハざきよ我身の上となれハ命ハ惜しきものにてそ候けるぞ人のきこし召さる所も恥かしゝ井上

知章

和章

宋

至つて常に秘蔵しけるの祈として毎月朔日に太山府君をまつられけり
此殿は天下にならびなき名馬にて主の命をも助くる知盛の生得勝たり
孫にあらんと案見者もあり独見勇に不あり故に讒する族も之
せずとするは兵の勇也大将軍たる人は卒忽に死するものにあらず
我身の死生は味方の存亡にあづかる大切の身なれば慎べきこと也懸
しべきにはこれ始終を全するをもつて勇とし智をもつて本とする事より
大勇は臆病に似たりといひ伝へり韓信が股下の小辱を忍びしく
漢の大功をなすも臆病に似たる忠勇也平家は大将大智有
といへども詠歌管絃に長じ香車風流にうかれて軍旅に
至りては甚懦怯さへ也中納言知盛能登守教経両将の勇
智なくんば平家一日も保べからず教経一の谷落城のとき一條

次郎と組で討れ給ひけるハ知盛平家の輔佐として給ひけれは
八嶋まで落給ふに及ばず一の谷にて一門残らず滅亡せん知
盛これを恐し子知章を亡し只一人寒く帰り給ひ
し也時に知盛ハ守禦の功多して征罰の功第一なる故に
其ハ勇智知盛の臣八嶋敗軍の附永年掃除し給ひ
官女に対し只今坂東東国夷を渡海なしと難然て定
給ひし勇阿波の民部が回忠を察し給ひし智源なれハ証
ざる大将軍にあらずや大行不顧細謹と樊噲がいひしハ知
盛などの行跡にて知章生年十六歳いまだ幼若なりと
いへども敵将の首を得て父の死に代る勇気名誉千
載に伝ふ父子ともに真の大将軍なり

采女

采女(うねめ)といふは人の名にあらず昔は国々より十三四五歳の童女(どうによ)を一人づゝ内裏(だいり)にまゐらせ常に天子(てんし)の御側(そば)に給仕(きうじ)しまゐらせしを采女といふ平城(へいぜい)天皇(てんわう)の時一人の采女あり天性(てんのせい)美麗(びれい)にして紅顔(こうがん)翠黛(すいたい)無双(ぶさう)の美女(びぢよ)なり其かたち婉娩(やさ)しく従(した)がひて情(なさけ)深(ふか)かりしかば帝(みかど)御寵愛(ちようあい)ふかく三千の寵愛(ちようあい)一身にありて常に召されて片時(へんし)も御側(そば)を離(はな)れずまゐりて采女世にありて目出たき事におもひまゐらせけるに人生莫作婦人身(ひとうまれてふじんのみとなることなかれ)百年苦楽由他人(ひやくねんのくらくはたにんによる)といふ詞のごとく帝他の后に御心を移し玉へば采女世に心細く夜(よる)昼(ひる)心にかゝりて何とぞ我心中の哀(あはれ)を叡聞(えいぶん)に達(たつ)せんと思へど人傳(つて)のなきを歎(なげ)き心を悩(なやま)しけれど猶(なほ)ありてかくと奏(そう)する者(もの)も

なく更闌夜静長門閉而不開月冷風秋団扇香共
絶ぬ帝はわすれし覚もなくらし人寒閨に独ゐて君恩の葉
よるも寝ずをうらめり行宮見月傷心色夜雨聞猿断
腸声乃くるにつき哀につき思の数まさりて堪くば世に存すべき色
地もなく或時ひそかに忍出て猿沢の池に身を投てうせぬ帝かく
ともしらせ給はざりしが末のつゐでに奏しければ大に驚せ給ひつゝ
あはれとおぼして彼池の辺に行幸ありて人々に追悼の詩歌をよませ給ひ帝
も御製あり
猿沢の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひなまし
又人麿も供奉しけるにかく詠じける
わぎもこが寝ぐたれがみを猿沢乃池の玉藻とみるぞかなしき

采女

春日社

采女

わきもこかねくたれかみを猿沢乃池の玉もと見るそかなしき
衣掛柳
猿沢池

今猿沢の池のほとりに采女の社衣掛の柳ありて□□乃内に采女のたゝりといふハしも采女か事にあらず聖武天皇の御宇葛城の大君勅使として奥州へ下り玉ひしに奥州の国司の云我国ハ大国なれバ葛城の大君紙下さるてハ不足なりとそありけれバおそろかりし葛城の大君大に怒玉ひ我不肖なれど勅使として来るにかゝる無礼のふるまひやあるとて怒玉ひし附御酌を侍る采女

浅香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我思はなくに

と詠じたれバ大君も解て興ぜさせ玉ふ故に古今和歌集貫之が序にハ浅香山のことばハ采女のたはふれよりよみてとあり古へハ難波津浅香山の両歌を歌の父母にしてならふ人のはじめにしけるとぞ

木賊

此謡は信濃国小縣郡に父子の者民あり家貧しくして父は木賊をからて家業とし子はいまだ幼哉時しも人に勾引て何国ともなく失ぬ父悲哀のあまり是なんよりて其身も狂気となりいづくともしらず尋ねべきよすがもなかりけれども恩愛の纏絡は是もやぐら道をあやしく往来の路に庵を結び旅人を留て我子の行末を尋ねける子は都に育ちけるが成人に従ひて父の道の鬱悒何とぞ今ひとたびに今一度父に對面させ玉へと佛神に祈誓して我国は信濃なりやゆかりなれば命かぎりに尋んと思ふ故彼国へぞ赴むきけるより幼き時離れし古郷なれば漸くそれとしらねど天神地祇の加護にて仰く不思議彼庵に止宿せしに父子再對面し孝を尽して事けるしるしいまだ実録に不見といへども蓋父の哀ゝ孝子の志感ずるに絶さる見父母を亡ぬれば朝夕側を離ず

木賊（とくさ）

木賊（とくさ）

源氏供養

源氏供養
石山寺の景

本堂
白山明神

立居に心をつけ信実粉骨して労をつくすを孝といふ也尤貧者ハ
孝養のため後世をつきそへハ他国へもおもむき定省の孝をかくハ力
に及ばざる時ハ仏神に祈て父母の安穏を願ひ古へ皐魚といふ人路の傍
に哭せり孔子其故を問玉へバ皐魚が云某学をねがひ天下を周流
して父母孝養のためにといへども久しく志をとげざるうちに父母死せり
また樹欲静而風不止子欲養而親不待往而不可返者
年也逝而不可追者親也我後悔すといへども及ばずといひて哭
死せりこれを聞て孔子の門人志を帰て親を養者十三人ありし
まことに風木の感といふ此謡を聞人も恩愛の切なる故其
孝志を感發せば万代不朽の亀鑑ならん

源氏供養

紫式部は初の名藤式部といふ越前守為時が女にて上東門院の
官女也幼より心明達和哥の道に長じ和漢の書にくはしく殊に其
深き理をも理会し兼て仏経にも通じ天台一心三観の血脈を
きはめ或時斎宮より上東門院の御方へ珍しき草紙あらばとの所望
と御使ありければ式部をめされ斎宮より満くの所望ありけれバ竹
取物語はめなれ玉ふべければ新しき草紙作り出すべしとの
仰せは式部当時の面目と云へども新たに作り出すなれバ何を種に
作るべきともおもはざりしかバ石山寺に籠り観世音に祈念しけるに
八月十五夜とて秋水漲来船去速夜雲収盡月行遅と云
を澄しけるに忽然と須磨明石の二巻を作り初しより終りの
巻々迄にて筆に任せて作り出せり故に須磨の巻は今に古以

八月十五夜なりとあり其言荘子が寓言にならひ假をもつて眞を
と古人より同字草紙多しといへども此物語をもつて宗とす就
中紫の巻乃詞絶妙なりとて名を紫式部と號す時の人日本
紀局と稱す源氏物語六十帖と号せども今有所ハ五十四帖
なりこれハ和哥の修行にて深き心ありとしるべし源氏供養の
表ハ安居院法印聖覚が書る源氏供養の表白といふなり
ありそれをもつて此謡を作るといふ

謡曲畫誌巻六終

謡曲畫誌巻之七目録

和布刈
張良
楊貴妃
女郎花
阿漕

謡曲畫誌巻七

和布刈

和布刈の社ハ祭神彦火々出見尊にて今豊前の國企救郡隼人村に跡を垂玉ふ地上古ハ長門の國に屬せり神功皇后三韓征伐の時門司赤間の間一里づゝ海となる是より門司の関和布刈神社ハ豊前の國に屬し赤間が関ハ長門の國に屬す是を隔て長門の國早鞆明神とあるハ古へを引て書る也當社毎年除夜の子の剋に海水平然として乾き海底平く成時に神職の人々炬明をとりて海底に入て和布数多生じあるを是を刈て立かへり翌元朝神前に備ふこれを和布刈の神事といふ此年中第一の神事なり奇異の神威あり故に龍神大蛇と現じ潮を守護して四方に退くといふ

和布刈（めかり）
隼人明神

和布刈(めかり)の神事(しんじ)

凡月の出入に随て潮の盈虚するは常理也又後光厳院の康安の
ころ秋七月阿波の鳴門俄に潮去りて平地のごとく岩の上に魚類あるを
き数日ありて行方とそなくあるは地妖のいて来る也さるに地震より
て潮の乾く事は多く是当社燈籠の神事のごとく幾百年以来
絶ず起れども刻限に少しもたがはざる事同年は神慮ゆへ奇感あるべけれ
ども聴人感涙を催して信を起すとかや豊国社壇の中にて
見える海の宮より帰る時豊玉姫のたまひけるは妾すでに娠めり君は
むで風濤壮日海辺に出べし産屋を作り玉へ妾君の為に就とる
約して風濤急峻日海辺に鸕鷀の羽をもつて産屋を葺て待玉ふ
に屋の甍未だ合ざるに豊玉姫大亀に駕女弟玉依姫と海を光
して来到玉ふ豊玉姫ことごとく謂て臨産の時必ず産屋を勿臨とかく

羅生門(らしやうもん)

羅生門
らしやうもん

往昔鬼魅の片臂を得たる事を記さるゝ後件の妖魅綱が伯母に化
偽りて臂を奪破風より飛去れり是より後は一堂の屋作破
風を用ひざるは此ためなりと児女までもよく知る事也綱は四天王
の随一勇気智謀兼備へ武名の良将也一生の武功甚だ数かぎり
なし就中鬼魅を退治せし事古書に載る所三ヶ度あり大和国
宇多郡大森の下にて鬼の片臂を斬る都一条の戻橋にては鬼
母に遇て是れを退治し羅生門にして鬼手をきる其頭おさへける也
然ども後の伯母に化て臂を奪とらるゝは皆一たび綱なれども大察當
子の至孝ありとも同術にて三度までたぶらかされんや三説の内二説は
虚なるべし羅生門は古より妖魅の着すしや都良香詩を案じて
羅生門にいたりし気霽風梳新柳髪と吟じけるを其上より和せられき

却りて氷消浪洗舊苔鬚とつけゝり都良香大におどろき是を去
けるに菅家に遇まゐりてありしまゝを申ければ公二句を吟じ
て是れハよしと菅家笑せ玉ひ後の句ハ羅生門の鬼神のつけ
し句にあらずやとの給へバ都良香絶倒して公ハ実に神に通じ
玉ひしとぞきこえける紀が退治せし鬼魅ハ暴悪を記乃
曲者なれバ何ぞかゝる妙句を吟ぜんや凡怪力乱神ハ
大聖孔夫子さへみだりに其理を信じ玉ハず況我等が輩の論
ハあらぬ筆をそへおく後の君子乃折中をまつべし

楊貴妃

唐の玄宗皇帝ハ其初堯舜の治世にもかへさんと女楽
を禁じ珠玉錦繍を焼良臣を選て政を委二十餘年の間

楊貴妃

政冰霜のごとく淳風変化百姓野に拝て至治と称ス惜哉中年に及て志弛行怠り情欲に縦き宮女の寵を縦にし大乱乃端を開き唐の世終るまで治道の害となれり詩に曰靡不有初鮮克有終とは玄宗の謂なり玄宗寵愛の美人武恵妃薨じ玄宗深くなげき給ひ三千の後宮一人も心にかなふ者なし或人のいふて寿王乃妃楊氏美色絶世なりとされ以て奏す玄宗大に悦びみづから奪ふて後宮に入君王の側にあつて一たび笑ば百媚生六宮の粉黛無顔色これより玄宗いよ〳〵朝政に怠り金屋粧成嬌侍夜玉楼宴罷酔和春楊氏が兄楊国忠妹乃寵に依て又太宮に昇て栄耀家門に溢ぬ是くは天下の政にあづかり唐の国乱へ

朝陽出て残星光を奪ふて如く致仕し林下に退く外には楊国忠
下民を虐内には安禄山楊貴妃に通じけれども玄宗に志して朝
政道侫臣の手に落悪言天下に満て安禄山河を得ると
終に唐の天下をうばはんと藩兵十余万を率て漁陽より
起り詭て楊国忠が誇奢を誅して下民をすくふと披露せし
かば一人としてこれをふせぐ者もなく皆一同して指闕せんのかぎりにて
玄宗は驪山宮に御幸ありて楊貴妃に霓裳羽衣の曲を舞せ
みづから糸竹をしらべ玉ひ天上の快楽仙家の栄もこれにはすぎじ
と楽しみまさに央なるに九重城闕煙塵生じ鞞鼓の声
地をうごかして来る文武の百官ちりぢりにさりぬ玄宗は楊貴
妃をともなひ蜀に幸させて落させ玉ふ馬嵬が驛にて将士飢疲て

楊貴妃
やうきひ
蓬萊宮
謡曲畫誌巻七

蓬莱宮

皆憤り怒あへてうごかず陳玄礼奏して曰く禍乱の源ハ楊国忠が
謀なきゆへによる国忠に死を賜らずんハ六軍あへてうごくまじ
帝これに力及バず終にこれを除かる又人々ハ将士大に怒び戦をなそ
国忠が首をさす而して六軍猶不行玄宗是をきく高力士に
いはく其故をとはせ玉ふ陳玄礼又曰楊国忠死をたまふといへども楊
貴妃いまだ御側にあり願くハ貴妃を賜れと玄宗の曰楊
貴妃常に後宮の深きにありて国忠が悪逆にあづからず朕死
すとも貴妃を殺さじ高力士が曰楊貴妃実につみなしといへども
将士国忠を殺して貴妃陛下の左右にあらバ将士何ぞ心
安からん天下の美人楊貴妃にかぎらじ陛下需め玉へ玄宗理
に伏して高力士をして貴妃を仏堂にて縊死をとらしめて将

軍士柔帝を守護して蜀郡に到る帝いそぎ花のみやこを歎しひつゞきて歎きおはしけるのち唐の忠臣義士粛宗を扶て賊将安禄山史思明を亡し玄宗を都にかへると再馬嵬を通らせ玉ひ躊躇して進ミ玉はず漸く古宮にいらせ玉ひて椒房池苑明に依夕殿寂寞として漏長く眠も就玉はず鴛鴦瓦冷霜華重翡翠衾寒誰与共と歎きけるをかされ年を経て益深くなりけるに、かの臨邛の道士鴻都客蓬莱宮に入て形見の鈿と誓の詞を得てかへりし事は長恨哥にかけるところ楽天が詞筆艶文なり

女郎花

城州男山の女郎花は所にも読し名草なり土俗いひつたふ

昔八幡山に小野頼風といふ人あり容儀うるはしく情ふかき者そ
ありしが或官女に契をこめ濃かに中よく毎夜八幡より至く
し官女の許へ通ひける頼風不用ありて一月餘り来らざりし
を女うらみかこちけるさい外に通ふ方ありて我方のうとくなりし
物ぞと知ればまさに捨られる我身なれば世に存へて其
為一たび偕老同穴の契をこめつる人にまでつれなくて云
何とも貞女の道をそむきて異男に嫁せん物ぞとまなし
すぐ死して我志を顕さんと思ひしとそれあかる身
なればせめていまの家近き川に身を投水底の藻屑とならん
て夫のうげをみてとがよせんと八幡山へ瀬行放生川へ身を
投ける頼風かくと聞よりも驚きさわぎしもや我妻ならでや

女郎花
折とらば手ぶさにけがる
たてながら
三世の佛に
花たてまつる
謡曲画誌 巻七

女郎花（をみなへし）

塚の端に我屍を韓朋と一所に埋みけれと書なり墓にいよ
くつがへりて別の所に埋めさせけるに二の塚より一本づつ梓
生じ根は下にて交り枝は上にて連るこれを連理の契といふ
此外望夫石虎が石箭皆執念乃なす所なり

阿漕

此謡は古今に
逢ふ事をあこぎが浦に引網の度かさなれば人も知りなん
乃歌を作りて勢州阿漕が浦は海人多く魚を捕て
生業とす此所は太神宮へ神供調進の為に網を引所
なり神明の御誓にて今の浦よりも此所に多くの魚鳥集
まれども神供乃外とらぬ事を忌して一人も私

阿漕

さびしさあれば

帝也けり又瞽瞍人を殺さバ舜いかゞせんと問れ天子の父なれども
法ハ枉られじと舜瞽瞍を負竊に海濱に遁んと孟子こたへ玉ひ
し也俗間の流に貧の盗ハこれ有といひ何ぞ節操有者にても貧
なれど非常の振舞ある時は淫義も罪せらるゝハ知ずして貪欲を
盗と云行者とて凡人にても小心翼々あるハ貧困飢寒の場に至ても
法を犯すハ有まじ其余貧富ハ天命也定る所人力に及ざれば情いふハ
物を乞るハするゝハ乃至不義者凡人にても理合点する者すく一寸紙金まで乞るの
京也小山田太郎が軍法を負きて青麦を刈しハ武略のあやまり
ゆるさる可也これを知して小法にかゝはる者ハ虎を画て犬
に類る物也此謡を俗人拳々服膺して出法とてもみだりに犯べからず
謡曲畫誌巻七終

謡曲畫誌巻之八目録

山姥

大佛供養

江口

鉢木

雲林院

謡曲畫誌巻八

山姥

本朝に古より云傳る山姥は山靈の鬼女にて酒田公時が母なり源頼光上総守たりし時常に近習の者に語りたまひしは竭智附賢者必建仁策索遠求士者必樹伯迹と云り漢の高祖は蕭何韓信張良陳平の四傑を用ひて漢朝四百餘年の基業を開玉ふと我も綱季武貞道の三男士あり此にて今一人の勇士を得ば漢高の四傑に同じ朝家の法儀に於て何の憂かあらんとのたまひけるかくて頼光任限充て上洛の時豆州足柄山にて眺望したまふに南は蒼海雲に連り北は重山霞に峙ちひるさゝ彙地にして山後に何工削成青巖之

山姥

春山無伴獨相求
伐木丁々山更幽

山姥

遠近のたつきもしらぬ山中に
おぼつかなくも呼子鳥かな

はよむ機女なり是の字を取ちげしものは女常に一日ニ五百反づゝの機
を織海神の衣とになす五百機立ることあるもはなはだ或ハ龍宮へつくれ
ゑくり紡績のわざを業とす一生不犯の女とある時は女天水の氣を
うけて孕ることありて機織におこる是ゆゑに山神に通じて足柄山
小庵を結び住日を経て一人の男子をうめり是山姥也七五歳まで
足柄の山谷にそだち深林におゐて山へゆき伐木丁々山更幽
とハ杜子美張氏が隠居に題する徂徠山のさびしき伐木ハ松の木
を伐る事にあらねど空谷寥々として魑魅のひゞき是山姥の所作ならん
ゑさけふろくなる豫ましへバ先達と推まをこれハ華まぐ肩を
たゝくなる山姥の所業なりとぞ

大佛ノ芸にて

大佛供養

大仏供養

ユシ
ウスカキ
アサキ

すれば佐貫(さぬき)四郎やがて押(おさ)へ頼朝の前に引出す忠光少しも偽(いつは)らず
某(それがし)ハ平家の士(さぶらひ)上総五郎兵衛忠光なりそれハ八嶋を落(おち)てより以来(このかた)
亡主(ばうしゆ)の仇(あた)なれば頼朝を討(うた)んと思ひ此所(ここ)にまぎれ一太刀
も合さばやと思ひしに口惜(くちをし)さよ願(ねがひ)くハ早(はや)く首(くび)を刎(はね)られよと申す
同類(どうるい)やあると責問(せめとふ)ば此比(このころ)の平家の有様にて同心(どうしん)仕るべきとて
其後ハ物をもいはざれば頼朝梶原(かぢはら)景時(かげとき)に命(めい)じ梟首(けうしゆ)せらる
忠光景清ハ平家の士(さぶらひ)大将にて武勇(ぶゆう)の名あり平家亡(ほろび)てハ越
中次郎盛嗣上総悪七景清ハ天に跼(せくぐま)り地に蹐(ぬきあし)して忍びかくれ
或(あるひ)ハ土民(どえん)に殺(ころ)され又ハ盲目(まうもく)となりて草野(さうや)に死するを不義(ふぎ)の汚名(をめい)
残(のこ)す事多く其伝(でん)を読(よむ)人切歯(くひしばり)瞋目(いかりめ)其罪(つみ)を責(せむ)忠光一人雪(ゆう)
し士の志(こころざし)を失(うしな)はで身を捨(すて)て前(やく)に出て苦(らく)して亡主の仇(あた)に近(ちか)づき

志士不忘在溝壑勇士不忘喪其元といへり実に感ずべし

哀情が及ばざる所なん

江口

此謡は性空上人西行法師二人の故事を合て作れり播州書写山の開基性空ハ俗名仲太といひて京の所々に住附ぬ代々仏を信ずる家なり仲太一見せんことを願へども附ねバうさ一日将棋を出されたる附とらめでひ附ねの子十歳なる稚児を抜て志しを見るにえ落して溜毒にあり仲太大に悲しといへ是意の方思のいて海然るなるれ又く他むりで我仕業なりといひて海が罪を救はんと仲太再ねして君の大慈ける世を忘れ申したて大な陀ぶ附ね帰りて硯の名を抜き破るなりんで大きにおどろき甚

江口
えぐち
淀
佐多天神

江口ノ寺

江口（えぐち）

河船を
とめく逢瀬の
泪まくら

元おさむ不逢と云ハ數千と積といへども不会ざりし。
世の○諺ニ立袖るにしき木の千束にてあるよしなり
とも誤り狭布の細布といふも東国狭布の里より織出せし布なり
此布たるせばく楔ゆへしろがりかりしをあはぬにたとへて古より恋
歌によみ来り昔此狭布の里に住ける男同郷の女をこひて錦木を
錦木は女の門に立袖に女子に不関入男の来りしびには門を閉
入て細布を織居しいも錦あはいで恋をするのみえされども女ハ
思ひ出る事なかりしば風の朝も雨の夜も三年の間かゝはらず
錦木も千束に満たれども女猶出ざれば男は終に
きれしなく機屋に立寄れば夕殿螢飛思悄然秋燈挑盡
未レ能レ眠といふ句を吟じける其後は飲食を断て遂に二十日餘

錦木

綿木

つる縁によるべく成にける女此事を聞て只寧我を忘られ給ぎて死
ざりし事ゆれながら寠く男の心変りても今はかひなく何にかはせんと
おもひて深淵に身を投たり里人これをあはれみ二人が死骸
をひとつ所に埋み夫婦塚となづけ又三筋を埋みし塚を
三筋塚と号し今も此里の女布を織て家業とせん

雲林院

此謡は摂州芥屋の里に公光といひし者あり幼きより和哥
に志を深くし常に伊勢物語を愛しける或夜の夢に公卿一人伊勢
物語を持て桜花の下に来り告ていはく汝伊勢物語の奥儀
を知らんと思はゞ雲林院の紫の花の林に行べしと云終りて[illegible]
覚て後公光不思議に思ひ都へ上り雲林院へ行て見るに翁一人

花燭爆より發して始識春風様上巧非唯織色織分
芳と口号す此夜又夢中に在原業平朝臣二
條后高子の君に遇て伊勢物語を艶しと也雨林ハいらぢ
いとよみぐく大徳寺の門前なる村の名古より櫻の名所なり
常康親王僧正遍照出家し住しるるあれども業平の旧蹟なるを
不審業平何の因縁ありて此所に奥旅ハなるや梅川井戸
在の里ハ業平在世の時此里にまたり
賤の衣の星ありし色れ覺すも我住るこの木皮の燒火ゟ
といへるに名ある所よりれし旧蹟なれバ其奥もありぬべき事又
まくひの業平より将衣の権を冠の中なれバちらつきとあり
元来衣ハ冠を用ひ將衣よハ烏帽子を用ひるす定式なり

雲林院
みてのみや
人にかたらん
桜花
手ごとに折て
家づとにせん

春風ハ
花のあたりを
よぎて吹
心づからや
うつろふと
見ん

雲林院（うんりんゐん）
散（ちり）ぬればのちハ
あくたになる花を
おひしらずも
まどふてふ哉

されど狩衣の袂を冠ようちかくほと書しハ不都合なる作意
この狩ぎぬの事紙本ハさる人すれバ此謡を画かるゝゆゑしめよし
或書に云直衣ハ烏帽子を用ゆる事旧例なるにあれバ
いへども是れも意体ありてかきたるなるべし

謡曲畫誌巻之九目録

玉ノ井

俊寛

軒端梅

草紙洗小町

熊坂

玉井

彦火々出見尊ハ地神四代の御神也兄の神を火闌降命申て常に海に遊で漁を好ミ玉ふ弟神彦火々出見尊ハ山に入て狩して楽ミ玉ふ或時火闌降命彦火々出見尊にのたまひけるハ今日ハたがひに得物をかへ海ハ海にて釣らるべし我ハ山にのぼり狩をせんと弓矢をとりかへて各別れ玉ふ彦火々出見尊ハもとより得られ玉ハぬ事なれバ釣を赤女といふ魚のために失ひ玉ひ兄の命ハ怒り玉ひて強く責まゐらせバいかんともせんと極く深くをめぐらし似せ釣をあつらへ給ふに火闌降命も納目

玉井

り兪不識ゑじ赤女口の疾ありて来ざりしを因召よせ甚
以て探るに果して失へる鈎を得たり其のち豊玉姫を
娶りまいて纏綿篤愛て海宮に留住まふ事三年ばかり
憶郷乃情ありしまゝせば當還去と豊玉姫父の神に謂く
爲に悽然數歎まふの色あり子まはくうゑ乃憂なく人と
海神則潮溢潮涸二乃珠をさづけて郷に帰らしむ強の
文章のできは日本紀神代巻にくわしき事は塩土の翁
といへるは神に塩を作りまふ浄神伊弉諾尊の子
まて事勝国勝長狭といふまたくろさのおめにたまふや
といへるは此る海宮にまりたまひを知りたまへく甚秋充
人まわとど天より降臨まふるが地より湧出るまへか人かと

玉の井
海底の都
謡曲画誌巻九

玉の井

すゞろにいひをなさばあるにも浦島といへる縁世俗間竜宮の乙姫といへるは豊玉姫なり神代巻に海神の美人といへるを乙姫といひあやまりは海宮を或秘説に海神の宮といへど住吉の末社に綿海宮ありしなり秘中の深秘といへりちなみをひく考るに諸社に綿海宮多くある神詣来なりとも穂ば海神の都とて住吉の末社なるべきか神后は深秘多く説ありて一定しがたし

俊寛

新大納言成親平家の栄花を嫉み謀叛せしかば丹波少将成経法勝寺執行俊寛平判官康頼等

甚重なりゆへ太政入道大に怒り死罪に行はんとせられしかども
丹波少将は入道の弟門脇宰相乃聟なりゆへ門脇度々なげく
憐愍せられけれバ死罪をゆるし三人共に薩摩がた鬼界が嶋
へぞ流されける但し是までハ惣名にて七嶋と名付
十二の嶋あり康頼ハ知度の嶋俊寛ハ白石の嶋成経ハ鬼
界が嶋にすてられし神ハ三所に有といへども網母瀬
ま係衆て俊寛も康頼も鬼界が嶋へ寄合ける此嶋に
一つの離山あり谷深く峯高して嶋の人も常に通ハぬ所
なれバ蒼波路遠く雲千里白霧山深鳥一声も響ず
此所に岩殿と名付る社あり嶋乃者どもの数へしを以
て康頼入道けるハ其三十三度熊野三所権現と崇て

俊寛

鬼界嶋

流しに逢り免状をおろし成経康頼両人に相渡すと俊寛には
何事ぞ我等三人同罪同所に流されし二人は召帰されて一
人嶋に残るべきぞ都までこそ恐れあらめ九州の地までは
具してたべとそもだへこがれて歎きしもゆるされざれば力なく
終に舟押出せと俊寛渚に止りて情なの人々や我を捨て
行衛しらずと足摺してこそ歎きけるさてに俊寛近侍の童
有王丸といふ者あり主の前途の覚束なく何とぞ役
あらば彼島に渡り命のあらん内今一度対面せんとくるで
一人弥生の末に都をおいまぎらしね薩摩がた鬼界が
島へぞ渡りけるさなくれ海路なれども主従なげじほそ
日数つもりて漸く鬼界が島に着く傍船に乗じめくり

俊寛(しゆんくわん)

軒端の梅といふハ上東門院の官女和泉式部が常に愛せし
梅にて今の東極誠心院の方丈にあり俗間にいふハ上東門院
御所の古跡なりといへり和泉式部ハ風騒の詞人にして香
の朝夕これを愛し此の夕れ月を弄びしそのうれし九梅の花
さるハ花の色香を愛するに非ねど式部常に五障
といふあらぬ障ありて成仏得ることかたきを歎きて
法華経のうちにハ法花経にハ八歳の竜女成仏せしむるあり
殊に餘経にてハ女人ハ深き罪なれバ悪人ハ成仏せざれ況や
畜生修羅草木国土をや法華ハ一代諸法を摂るゆへ
これを結縁する衆生ハ皆令入仏道と説玉へり是故に
朝夕法花を読誦するといへども宮仕の身なれバ忘れ怠ると

軒端梅

年月経
ふる身
軒ぞれ
梅乃
香

東北

門の外法の車乃音きけバ我も火宅を出にけるかな

草紙洗小町

草紙洗（さうしあらひ）
小町（こまち）

貫之が草図にて万葉紙洗ふらバ惑よ光あるべき事なれバ此
歌づくり文字消て跡もなし黒主面目紙失ひしたる名を
得たる歌人なれバ手習を勝ちとし勅勘の御法をうつしてと
但此人々は時代大に違へり小町ハ仁明天皇の時の人黒主ハ
光孝天皇貫之ハ醍醐朱雀両朝の人なり志るるに一和
より余千するの未詳或人のいつくし隠ハ紀貫之が古今の
序に小野小町ハ衣通姫の流なりて哀なる部ありてはよわ
らど好女の悩めるに似たり黒主ハ手を拙賤しく彩を
負たるハ山人れ花の陰に休むがごとしと二人の体勢を論じ
たる心をかりて草紙洗乃趣向を述べたり付る黒主ハ小町
とくどもかに五六歌仙の一人にて二重黒主の一主なりしる

率して周囲の地をとりし程の徳ある者なれば長ならず
をすべきや詩に比の体あれば比淫し比喩といふなどもあるべき事にや

藤戸

佐々木三郎盛綱は初めに先陣を論じて毎日志をなす
兄ならで藤戸の渡り海の浅深をはかりがたく昨日の渡は深
平の兵は平船に陸には矢を矢のごとく合せて勝負も決しか
されどある宵に小雨まじりて海上霧ふかくおもふ折
月夜なりければ盛綱ただ一人陣屋をいでて浦辺に越えて
深しらず此兒島の漁父がかく網をくりつ毎日の事ごと
よくしりて某村をとはして藤村に漁撈しぬ家に浦の
男とあるは小文治といひて同じく漁父なりしが源平初のなり

藤戸（ふぢと）

白

こゝろざしかりけるといへども狩倉する事あさましいでもも
されば仁も武も二つともに兼るをゆへ浦の男不便におも
ひつゝも人にりんかんとてゆるく引よせさしあらしける忍
武勇より敵をそうづちねといふものなり

謡曲画誌巻之九終

謡曲畫誌 後篇

全十冊

畫圖内外二百番

謡曲畫誌巻之十目録

邯鄲
七騎落
杜若
三井寺
小鍛冶

謡曲画誌巻十

邯鄲

唐の開元に比盧生といふ者あり帝賢才の臣を求玉ふと聞て都に出ければ邯鄲の旅亭にて呂翁といふ仙人と同く宿せり仙人盧生が心中の願ひを暗に知りければ富貴を受る枕をかしけり此とき旅亭の主粟を蒸盧生此枕て一睡しけるに夢に帝より勅使来り贈物を奉して盧生を召すと盧生悦び都に出ければ帝席を進づきて政事を問玉ふに盧生が答ること一々帝の御心に叶ひ監察御史より戸部尚書に遷る時の宰相これを忌て流言すれば端州刺史に貶されし三年を経て徴て常侍となる

邯鄲かんたん

邯鄲
長生殿

凡浮沈ある事二十年終に将相の位にのぼり帝かくれさせ給
ひて後は才一の姫宮を盧生にめあはせ天下を譲り給ふ秋月
高懸空碧外仙郎静翫禁園間七珍万宝心のまゝ叶は
ずといふ事はなかくて夫人ひとりの太子を生給ふ三歳の春
洞庭の波上に三年三月の歓楽をきはめ給ふに夫人太子を
抱ながら舟ばたより踏はづし海底に入給ふ百官騒ぎ乱れ
やくやといふ声に盧生欠伸して夢さめたるに黄粱尚いまだ
熟せざりけれや於是邯鄲午炊の夢といふ盧生寂老の夢中
五十年の栄花も覚てみれば午炊一黄粱の間にすぎず人間
の禍福夢中の如し荘周が尾を泥中に曳の亀と喩へ
陶朱が[illegible]

免ましく名利を忘れて生涯を楽しむ道なりと悟呂翁に謝し
て都へハいらで出家さん仙人となりしとぞ

七騎落

兵衛佐頼朝石橋山の合戦に打負土肥次郎実平子
息弥太郎遠平新開次郎忠氏土屋三郎宗遠岡崎
四郎義実藤九郎盛長主従七騎に打まぎれ伏木にかくれ
ましますを大庭見出さんとせしが梶原が情によりて一命
ほどなく土肥の杉山に逃かくれしが夫より真鶴が崎
より海士の小舟に乗て安房上総の方へ漕わたらんとし玉ふ
時土肥乃弥太郎申けるハ万寿冠者が来るべし暫待
て召具し申さんといひけるを父次郎実平きゝてとがめ給

七騎落

玉ひ叔の大都に囲まれ給へども八幡原の実範あへて来なる
く法守府に久りてのち大軍を率して貞任を亡
玉へり君今七歳にて為玉ひ波上に漂泊玉へども不日に運
を開かせ玉ひんと後しけまば判郎もまもりしくおぼしける
寄に三浦の別当義澄は衣笠の城にて只大介と一所にて
討死せんといひしを大介さ侮ぐ敦列で佐殿の御行末を
見奉り輔佐せん事こそ孝行ならんと討死をゆるさねぞ
義澄以下の人々を再び安房の方へ潜行る洲崎
といふ所にて三浦の面々佐殿の面と行合象かひり悦び
二下佐殿は当国洲崎明神に参詣ありて従校開運の
事を祈玉ふ抑当社は八幡宮を祝奉るなれバ判郎一巻の旁

七騎落

國の七雄武経の七書武藝の七賢竹林の七本漆園を花れ七條長尾子七馬士等とつゞく七々を用る
本吉例なりとぞ

杜若

此儀ハ法國一見乃僧三河國八橋ふて燕子花を詠吟
らし所ハ花乃精賤の女とあらハれ業平名寄の由来を語
つまとなり此事未甚本採をきつに八橋ハ燕子花の名
所そて古寄も多し能中業平朝臣當国まて下り所成
人かきつばたの五文字をかふらにすゑて旅の心をよみ給ひ
ひとひろ杜若ハ
からころもきつゝなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞおもふ

杜若

から衣きつゝなれにしつましあれば
はるばるきぬるたびをしぞ思ふ

杜若（かきつばた）

也と謡れたりされども燕子花は業平の時代まではありて
そのころは稀なりしや古詠にも
志見さく三河の沢邊に多く咲ければ因ありてかきつばたは
と読りて又謡にも業平卿の五節の舞の冠といへる事
甚不審なり豊明節会は清涼殿の天皇出御ありて琴を
弾じましませば神女空中に來りて袖をひるがへしけるより権
輿毎年十一月に行はるる五人の舞姫也業平に舞れしは一
縁なけれど歌但作者意味ありて花前蝶舞紛々雪
柳上鴬飛片々金といへるは百聯抄解に出たり業平
此詞は皆法身説法の妙文なりと書たるは却おかし時
よりて眞雅僧正は是は曼陀羅の生色とさりし家ありしに言

熟せしゆへに此俳言を言れ奥上句ふかへりといへるなり

三井寺

駿河の国清見が関に母子のもの有て孤独落魄として或時母が
くるもなく失ければ母かなしく歎きて観音に祈しれハ是を感
じて江州三井寺に行落ハ三井寺の住侶によりて出家の
望ありけるも八月十五夜住侶と共に吟詠し三五夜中
新月色二千里外故人心と口遊けるも母にめぐり而
ひろひとぞ此故事を擬なし作或人のいはく此謡の全
体ハ荘子が寓言に擬し母子再会させ故事を設あく
観音の利生三井の鐘声のよしを述たるものなり是本
みづからも花さくと書たるハ此全体の大意也諸仏降誕の

三井の寺

今宵一輪盈
清光何處無

三井のちご

山ざとの
はるの
ゆふぐれ
来てみれば
入相の
かねに
花ぞちりける

時は枯たる木草も忽花さくと諸経諸論に見えたり強欲
者一佛にかぎりたる事にてはなけれども康和乃鬼害
が徳まで卒塔婆流の時異夢に感ずる事あり観音安
と現じ万の佛の形よりも千手のちかひぞたのもしき枯たる
草木も忽ちに花咲実のなることぞきゝけと押返し三遍
謡ひしと見えしより此観音の利生に古木花を生ぜしと
いふ事といへり今こゝにいへるは観音の慈悲あまねくして人間
衆生は申に及ばず枯たる草木まで花咲実のなるといふ
これぞいはんや我子は若木のおもくちもんあれば観音乃慈悲
利生にて栄ゆくわれ事うたがひなしといふ義也発端ふ
大慈大悲の観世音とまうかゝるし草木の[illegible]慈悲の心[illegible]

音よりおこるといへり普門品に音聲皆得解脱といへり又
此寺の本尊ハ佛来てこれハ入相の○にきゝてさとるが
此いふ所ハ能因法師捨列合掌ちかく讃し奉る圓縁寺
乃遠景此寺にまうでて鐘に此寺の鐘ハ諸行無常より結ぶ
ある鐘にて

されバやミ井の古き鐘ハおのれとなりにける事又ハきこへ会を
此寺所によみし宝物あり凡観音の利生まことに釈尊再会
の教ゆる古書にのせたる事多し康頼の流罪の時その
子康基清水寺に祈て以て帰洛せり平惟盛乃室
長谷寺に籠りて其子六代の命を助るがかくのごとき
霊験勝計に遑あらずと

融
鳥宿池中樹

僧敲月下門

融

たゞ融公ハ嵯峨天皇の御子なり初て源乃姓を
賜り人臣に列りあふこれを嵯峨源氏といふ後左大臣ハ
此流なり融の大臣在世のとき名所くれ風景を移し
おひ吉野の桜尾上の松宇治の山乃葛楓まで庭お
うつされたり殊さら奥州塩竈の浦ハ日本無双
乃地勢にて
陸奥ハいづくハあれど志ほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも
とよみたる風景なり当社ハ味耜高彦根命にて始て
塩焼そめ給ふ御神なり此ゆへに今に土人多く塩を焼
大臣も此の風景を愛であまり都に

常に見て申す事成がたし依て此明神と申す鏡よ親し
塩焼風景を模造てまうり毎日難波浦より潮水三十
斛を運送しけるとぞこれを六条河原院と号す依て
河原のたえだえとなりにし此院の都一見の僧河原院の古
跡にて融乃霊と問答せし趣意は世に聞えしが
君まさで烟たえにし塩竈の浦さびしくも見え渡るかな
此と詠ける所の名をもつて旧跡を作れり此所は融大臣
薨じまして後は住人すくなくあれはてゝ孤花裛レ露啼ニ残粉
暮鳥栖ニ風守ル廃簾あるさは畫須消石種残御簾
断真珠不レ満レ釣ともいふべし要し此古跡をもつて此所
を詠ど強呉滅兮有荊棘姑蘇臺露瀼々暴秦衰

蝀

水中遊魚疑鉤針
雲上飛鳥驚弓影

まづ此謡曲畫誌乃全体畫工橘氏が筆勢活然たるのミにあらず神主高砂を畫きて延喜聖代乃目出たき和歌をあらハし此謡の懐古戒令をぬく糸乃紙もつて終紙結ずらず書れ能畫なるべし

謡曲畫誌巻十終

享保十七年壬子閏五月發行

洛陽 中村三近子編集

祝言

畫工　大坂　橘守國

彫刻　大坂　藤村善右衛門
　　　同　　村上源右衛門

焦氏筆乘　七册

増補會玉篇　四声韻附　并和訓附　九册

事物紀原　十一册

古今類書纂要　十二册

三字經註解　童蒙發ニ素讀書之　壹册

片壁艸法彙函　五册

四書集註　道春點　延享改正　十册

詩家必用　壹册

千字文　四體両假名附　壹册

神代卷　増穂大和改點　二册

藥性採要　本艸綱目要文ヲ拔粹ス　五册

張即之心經　石刻　折本　壹册

草訣百韻歌　趙子昂　石刻　一册

三法帖　井出正水書　石刻　三册

南宗和尚法帖　石刻　壹册

辨惑増鏡　殘口艷道通鑑之後卷　三册

卜筮元龜　四册

頭書天門八卦鈔　二册

咏語對類　聯句杯之熟語ヲ集ム　五册

袖珍畧韻　二册

近體韻選　壹册

魯寮文集　大潮和尚作　貳册

明詩礎　雲峯 五嶽 両先生輯　壹冊

古今咏哥集　絵入　二冊

部類現葉和哥集　新刻　十六冊

倭節用集悉皆袋　増廣 字便　壹冊

流れ〳〵草　新板 西川祐信画　二冊

杏陰拾唾　佐埜野叟述　一冊

明月篇　東溟先生詩 並門人之詩集　一冊

尺牘清裁　明王世貞撰　十冊

繪本倭比事　西川祐信画作　十冊

淮南鴻列解　廿冊

新增節用無量藏　増字画　壹冊

平家物語　平假名大字 絵入　十二冊

源平盛衰記　大本絵入 平假名　四十八冊

同　杭本　ひらかな 絵入 箱入　四十八冊

通俗三國志　五十冊

同　續三国志　三十八冊

同　漢楚軍談　二十冊

同　平假名　絵入　二十冊

堪忍記　平假名絵入　八冊

仲景全書　成無已註　七冊

易學啓蒙頭書　二冊

鶡冠子　宋陸佃解 明宇承啓評　未刻